

第26期考古学セミナー（2024年度）

—やまがたの遺跡の中のカミ・ホトケ—

第3回講座

講義⑤

「カミ・ホトケ」の信仰と経塚
—山形県内の経塚を事例に—

長井市史編纂専門員

岩崎 義信 氏

令和6年10月6日（日）

会場 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館研修室

「カミ・ホトケ」の信仰と経塚 —山形県内の経塚を中心に—

長井市史編纂専門員 岩崎義信

I. 経塚について

経塚とは

経塚は経典を供養し、土中に埋納した施設。

経塚の構造

地表面下に経典などを納める土坑を掘り、その上に土や礫を積み上げ封土としている。経典などを埋納する主体部は土坑や封土中に設けられ、礫や切石などで小石室が造られる例も多い。ただ、経塚には封土が明確でないものもある。

経塚の始源

経塚の始まりは平安時代後期の末法思想にあるといわれている。末法思想とは、釈迦入滅後に歳月の経過とともに正法・像法の世から、仏教の教えが廃れ混乱した世、つまり末法の時代になると考えられていた（末法元年：永承7年〈1052〉）。そこで救世主の弥勒菩薩が出生する56億7千万年後に釈迦の教えを伝えるため、経典を埋納する施設「経塚」が営まれた。

経塚の立地

経塚は霊地・聖地とされた眺望のよい山頂や高地、寺社の境内に築かれた例が多い。

経塚の経典

書写する材料で、紙本経、瓦経・銅板経・滑石経・礫石経・青石経・貝殻経に分類される。

経典の種類

法華経、金剛頂経、無量義経、観音賢経、般若心経、阿弥陀経、大日経、弥勒経などがある。

II. 経塚の変遷

1. 埋経の経塚（末法と教法保存の経塚）

時期：11世紀後半から13世紀ころで、盛期は12世紀。

納経方法：経筒（外容器を伴う場合もある）を土坑に直接、または石室を構築し埋納するが、石窟や岩陰、巨岩の割目に納める場合もある。

埋納品：紙本経、瓦経等の経典類。

紙本経を納めた経筒類（金属製・石製・陶製・木製等）。

発願者の氏名・年時・目的などの記銘もあり、造営の願意が読み取れる。

経筒を保護する外容器（陶製・石製）。

副納品：銅鏡、刀子、銭貨、仏具など。

願意：末世・末法と弥勒思想、如法経作法、追善供養、現世利益等が結合し、地域的特色の強い願意となっている。

分布：全国に分布するが、特に平安京を中心とした近畿と大宰府を中心とした北部九州に集中し二大文化圏を形成する。

終焉：12世紀末頃に衰退が始まり、13世紀以降の築造例は少なくなる。

経塚	発見/調査年	経筒	蓋	総高	外容器	銘文	その他
南陽市別所山経塚	明治 18 年 (1885)	銅鑄製 (一鑄式)	盛蓋 (特殊)	26.2 cm	石櫃	保延六年 (1140) 三月九日 大檀主 勸進僧正真 玄宗/ 出雲 千貞 女共	重さ 5.13 kg
高島町元和田経塚		銅鑄製 (一鑄式)	笠蓋 中央に 宝珠鈕	33.5 cm			重さ 8.36 kg
白鷹町称名寺経塚	平成元年 (1989)	銅板製	一段盛 蓋	21.7 cm			小石室
白鷹町笠松山遺跡 1号経塚	昭和 61 年 (1986)	銅鑄製	二段盛 蓋	21.5 cm	石製 37.8 cm		墳丘に二 重の周溝 小石室 経巻 (1号塚)
2号経塚					石製 41.6 cm		
山辺町普廣寺山経塚	昭和 8 年頃 (1933 頃)	銅製経筒 3 点 陶製櫛目文 陶製 A 陶製 B	松喰鶴鏡	20.2 cm 22.0 cm 29.5 cm	珠洲系甕 2 点		銅製経筒 と蓋は存 在しない
山辺町安国寺裏山 経塚 (仏舍利?)		陶製	陶製 鈕付き	21.7 cm			円墳状の塚 炭化した紙 瑪瑙礫
中山町滝経塚	昭和 52 年 (1977)	銅鑄製/筒 身底部片	平蓋		珠洲系甕 四耳壺		経巻 23 卷 朱書
寒河江市平塩熊野神 社境内地経塚 1号塚	平成 27・28 年 (2015・ 16)	石製八角型	底蓋石	52.5 cm (含:底蓋)		康治 (1142~1143)	小石室 塚を形成 溝跡確認
寒河江市高瀬山経塚	昭和 23 年 (1948)	壺 (珠洲系)		20.3 cm		右	蔵骨器? B 地点
	昭和 24 年 (1949)	陶製 鉄製経筒 底部片	陶製蓋	18.7 cm	珠洲系甕 38.5 cm		C 地点 D 地点
鶴岡市湯田川経塚	昭和 7 年 (1932)	銅板製		24.5 cm	珠洲系 甕/倒立	佐伯時兼	小石室
鶴岡市羽黒山頂経塚	昭和 33 年 (1958)	銅鑄製		14.6 cm		建長二二年 (1252) 壬子 八月八日 本聖人阿念房	老杉の根元 より一括出 土。後世の 埋納か
遊佐町金俣経塚	平成 3 年 (1991)	木製 (桐)	赤焼系 酸化炎 焼成	23.8 cm	34.1 cm		岩塊の隙間

2. 納経の経塚 (廻国聖の経塚)

修行者である六十六部廻国聖 (ろくじゅうろくぶかいこくひじり) ※が大きく関わってくる。

※ 法華経 66 部を書写し全国 66 の国々 (壱岐国・対馬国を除く) を巡礼し、1 国 1 カ所の霊場に法華経を奉納する廻国の修行者。

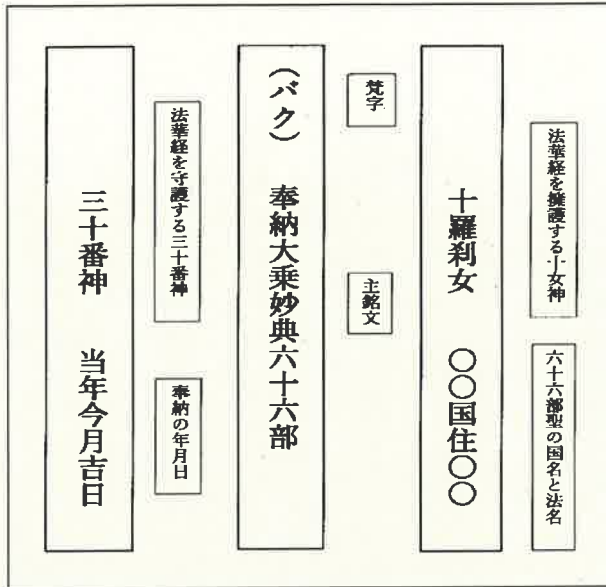
時期: 始まりは 13 世紀末頃とされ、特に 16 世紀の永承年間 (1504~1520) から天正年間 (1573~1591) の約 70 年間に普及し全国に広まった。

納経方法: 土中に埋納したり、寺社の境内の奉納所や鉄塔に納められた。

廻国納経塔を伴う場合もある。

奉納品: 金属製の経筒。円筒形が主体で、少数ではあるが六角柱や八角柱もある。六角柱は「六角宝幢形経筒」ともよばれる。これらの経筒は小型で規格化されたものが多い。

経筒には「大乘妙典」、「経王」、「妙典」、「如法経」、「大乘」等の銘文が多い。これらの經典名は法華経を意味しており、経筒内には法華経が収められたとみられる。
 銘文は中央に主銘文、左右には法華経の守護神の文字、奉納の年月日が刻まれる。



六十六部（『絵本御伽品鏡』より）

『国史大辞典』より

副納品：鏡、利器、銭貨、仏像、仏具等。

願意：現世利益、逆修供養（ぎやくしゆくよう）、追善供養が主体となる。

六十六部聖による同一主旨の納経が国境を越えたもので、地域的な特色が薄れた願意となっている。

終焉：16世紀末頃

経塚	発見/調査年	経筒	蓋	総高	銘文	その他
川西町菊田経塚	昭和 23 年 (1948)	銅板製	盛蓋 菊花文	10 cm	十乙刹女 奥州住 光養坊 梵字 奉納 経王 六十六部 三十番神 当年今月吉日	塚状遺構
川西町下小松経塚 (飛行壇)	明治 41・ 42 年 (1908・ 09)	銅板製 六角宝 幢形鍍 金	笠蓋 宝珠と 請花 蓋端に 瓔珞	13.5 cm	釈迦三尊坐像（普賢・文殊） 阿弥陀三尊立像（観音・勢至） 十羅刹女 大和国住巖清 奉納大乘妙六十六部 三十番神 当年今月日	塚状遺構
尾花沢市六沢経塚	大正 15 年 (1926)	銅板製 鍍金		9.6 cm	石州住侶 第二度 十羅刹女 天文五年 (1536) 奉納大乘妙典六十六部聖 三十番神 今月吉日 本願裕禪 聖敬白	塚状遺構
鶴岡市羽黒山頂経塚	昭和 33 年 (1958)	鍛銅製 鍍金の 痕跡	笠蓋 宝珠鈕	15.7 cm	妙法蓮華経一乎六十六部内 文保三年 (1391) 二月八日 檀那佐渡国雑太住人間七郎 入道沙弥暁忍 聖人同所住越中房蓮祐	老杉の根本より一括出土。後世の埋納か廻国納経では県内最古の例

3. 礫石経の経塚（礫石経と現世利益の経塚）

時期：室町時代後半から流行し、江戸時代に最盛期をむかえる。（近年、鎌倉時代末とみられる礫石経も出土している。）

納経方法：塚を築き埋納したもの、土坑に埋納したもの、建物の地鎮として散布したものと納経方法が多様化し、木製や紙製の納経札もある。また、「一字一石経碑」などの石塔を建立し、地

上の標識とした例もある。

奉納品：小礫に経文を墨書または朱書したもので、「礫石経」（一石経）と総称している。

一石に1文字ずつ記した「一字一石経」

一石に複数文字を記した「多字一石経」がある。

納経塔を伴う場合もある。

副納品：主体は経石のみで、まれに銭貨、刀子等がある。

願意：個人が発願・願主となり造営したもの。

高僧・有識者が願主となり、造営は結衆。

極楽往生、出離解脱、現世幸福、病魔退散、五穀豊穰、死者供養等

経塚	発見/調査年	立地	埋納施設	経典(数量)	銘文	その他
米沢市覚範寺経塚			土坑	総数 43,715 点 墨書礫 791 点		伊達輝宗の 供養寺 (16世紀)
白鷹町笠松山遺跡	平成元年 (1989)	山頂	塚状遺構/ 土坑	総数 1,547 点 墨書礫 273 点 一字一石(梵字)		1号経塚の 石積みを掘 込み築造 (12世紀)
天童市高野坊経塚	平成8年	自然堤防	土坑 (土坑は周 溝をもった 塚の内部施 設)	総数 54 点 多字一石の 墨書礫 26 点 一字一石の 墨書礫 28 点 線刻礫 1 点	御庄 政所 藤原 菩薩平等利益 (表) 梵字 一向義空菩薩 右為□□得 光明遍照 十万世界 (裏) 念仏衆生 撰取不捨 干時應長元辛亥	
					(表) 勸進聖人 大願主 行蓮 梵字 一向義空 時應長元曆 (1311)	
					(裏) 出羽 成生 □ 廿七年忌	
尾花沢市上林経塚	平成3・4 年(1991・92)	河岸段丘	土坑	総数 50,000～ 60,000 点 整理済 26,555 点 墨書痕 19,107 点 判読 4,181 点 不明 7,448 点	于□正徳三癸□ (表) 八 (1713) 四月從十七 □ 出カ 石カ (裏) 奉書寫大乘 妙典一部諸願 成就 □ (側) □六□	
長井市福蔵院経塚	平成5・6 年頃 (1992・93 頃)	平地:寺院	宝篋印塔/ 土坑	多字一石(梵字) 墨書礫 宝篋印陀羅尼經 (一切如来心秘密全身 舍利宝篋印陀羅尼經)	陀羅尼 寶篋印 蜜全身舍利寶篋 一切如来□秘密□寶 舍利寶篋印□□□	

Ⅲ. まとめ

1. 埋経の経塚（末法と教法保存の経塚）

〈信 仰〉

- ・経塚は11世紀ごろ、末法思想が広まるなか、教法を後世に伝えるために造営された。
- ・造寺、造仏とともに經典書写（如法経：法華経の写経）や経塚造営が作善業とされた。
- ・経塚は、たびかさなる災害や飢饉がもたらした不安な世情を背景に、浄土思想（極楽往生）とともに広まりをみせた。
- ・法教伝承に加え、追善供養、逆修供養、現世利益などの個人的な願意もみえてくる。

〈考古資料〉

- ・11～13世紀の経筒は、製作技法や素材の違いによって分布域を見ることができる。
 - 鑄式経筒＝筒身部と底部を一度に鑄造する製法。中部・関東・陸奥国で主流となった製作法。米沢盆地北部で散見され、太平洋側經由でもたらされた鎌倉文化の影響か。
 - 銅鑄製経筒＝筒身部に別づくりの底板を嵌め込む製法（入底式）。近畿地方で主流の製作法。置賜・村山・庄内地方に広く分布し、日本海・最上川ルートで山形県域に入った畿内文化の影響か。
 - 銅板製経筒＝銅板を筒状に成形し底部に嵌め込む製法。近畿地方で主流の製作法。置賜・村山・庄内地方で散見される。畿内文化の影響か。
 - 陶製経筒＝陶器の経筒で、陶製の蓋を伴う。山形盆地西部で集中的に出土し、庄内地方でも散見される。
- 問 題 点：陶製容器は蔵骨器など経筒以外の用途もある。特に珠洲焼系の四耳壺は、經典を伴うか否かで、経筒か蔵骨器に使われたか用途が分かれる。東根市大森山経塚で、限られた範囲から鑄製・銅板製・陶製の経筒が出土している。複数の経筒文化が共存したものなのか、年代差によるものか、課題である。

2. 納経の経塚（廻国聖の経塚）

〈信 仰〉

- ・廻国聖による納経は13世紀末頃から始まったとされ、特に16世紀の永承年間（1504～1520）から天正年間（1573～1591）の約70年間に普及し全国に広まった。
- ・經典の書写と埋納行為が作善業（さぜんごう）とされ、「聖」による納経が全国に展開した。
- ・末法思想が薄れ、現世利益や追善供養が加わり、経塚による信仰は庶民のあいだに広がりを見せた。

〈考古資料〉

- ・国境を越えた布教は、経筒の小型化・画一化、銘文の形式化を進め、地域的特色を希薄化させた。
- ・経筒は塚を築き埋納された。円柱状の経筒が多いが、六角柱状や八角柱状の経筒もある。川西町では廻国聖による経塚が多くみられ、「六角宝幢形経筒」が出土している。
- ・下小松経塚の経筒から、紙本経とみられる黒色の塊も出土している。経筒に經典を納めることが一般的であったのか、詳細は不明である。

3. 礫石経の経塚（礫石経と現世利益の経塚）

〈信 仰〉

- ・礫石経による経塚は室町時代後半から造営され、江戸時代に最盛期をむかえる。

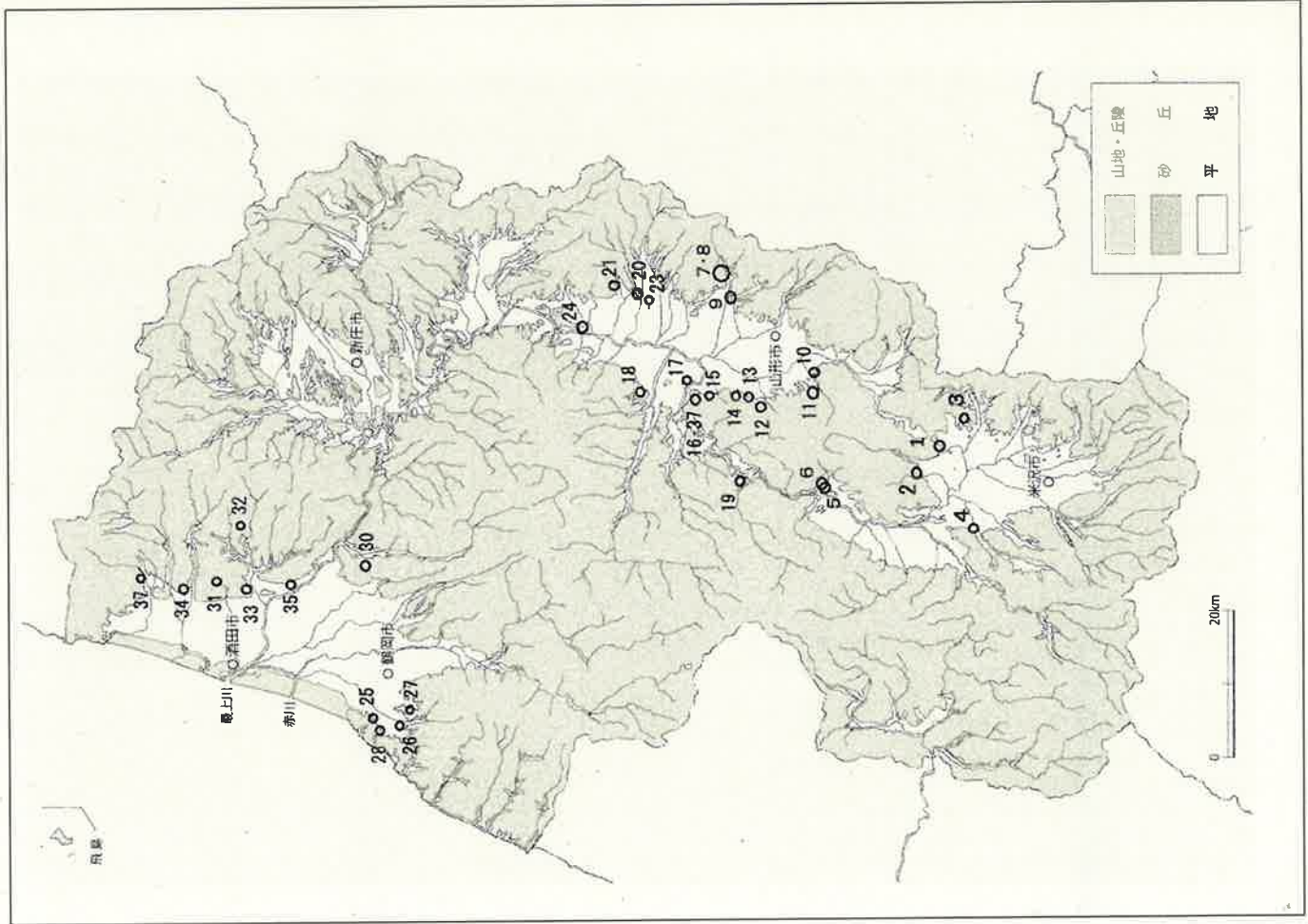
- ・個人が発願、願主となり、願意は極楽往生、現世幸福、病魔退散、五穀豊穰、水難除去、死者供養など現世利益が主体となる。

〈考古資料〉

- ・造営場所は、寺社境内、墓地、交通の要所、河川堤防や河岸、村境、村落を一望できる高地など。
- ・経石の埋納は、塚を築き埋納、土坑に埋納、建物の地鎮として散布、石塔の下に埋納、容器に入れ埋納などが確認されている。
- ・経石には一字一石経、多字一石経があり、墨書、朱書の文字がある。
- ・天童市高野坊遺跡の土坑内から出土した墨書礫は、紀年銘（應長元年〈1311〉）、埋納の趣旨や目的、関与した人物名、経石などとみられ、中世の仏教信仰形態の解明に関わる資料である。

山形県内埋経塚一覽

No.	名称	所在地	出土遺物	備考
1	烏帽子山	南陽市赤湯	銅製製経筒、須惠器系外容器	現存せず
2	別所山	南陽市宮内	銅製製経筒(保延6年(1140))石櫃、独古杵	所蔵:東京国立博物館
3	元和田	高島町元和田	銅製製経筒	別称:ババ岳経塚
4	尼ヶ沢	川西町下小松	鉄製製経筒2、須惠器系外容器	経筒存在せず
5	称名寺裏	白鷹町十王	銅製製経筒、刀子10、鏝	1989年称名寺遺跡として発掘調査
6	笠松山	白鷹町十王	1号塚:銅製製経筒、石製外容器、刀子2、軸木27、紙本経片、磯石経1547 2号塚:石製経筒、刀子4、如法経所碑	1986年笠松山遺跡として発掘調査
7	立石寺1	山形市山寺	経筒蓋(仁安2年(1167))	
8	立石寺2	山形市山寺	銅製製経筒、須惠器系外容器、軸木	
9	山形市大森山	山形市大森	陶製経筒、鉄剣	別称:古峰山経塚
10	谷柏山	山形市谷柏	銅製製経筒、須惠器系外容器、軸木、櫛薄双鳥鏡(葬?)	仁田(ノ)沢
11	仁田の沢	山形市柏倉	須惠器系外容器	
12	芳沢	山形市芳沢	銅製製経筒3、陶製経筒3、須惠器系外容器3	別称:普光寺山、経筒現存せず
13	普廣寺山	山辺町根椋	陶製製経筒	別称:安国寺
14	安国寺裏山	山辺町大寺	銅製製経筒、須惠器系外容器、朱筆紙本経片、軸木	
15	滝	中山町土橋	陶製製経筒、鉄剣	
16	平塩	寒河江市平塩	陶製製経筒、須惠器系外容器	
17	高瀬山	寒河江市寒河江	銅製製経筒	
18	根椋	河北町谷地	須惠器系外容器	
19	宮宿	朝日町宮宿	銅製製経筒3、銅板製経筒、陶製経筒、石製経筒、須惠器系外容器5、刀子30以上、水堂鏝鳥鏡	
20	東根市大森山	東根市東根	銅製製経筒、須惠器系経篋、梅花鳥文鏡、鍍金銅板鏝刻阿弥陀座像	別称:葉師寺
21	葉師寺裏	東根市東根	銅製製経筒、石製外容器	別称:光明寺跡(所在地不明)
22	光明寺	東根市東根	銅製製経筒(元久2年(1205))須惠器系外容器	経筒存在せず
23	白山	東根市幡音寺	銅製製経筒、須惠器系外容器	
24	河島山	村山市河島	銅製製経筒、須惠器系外容器	
25	大山	鶴岡市大山	銅製製経筒、須惠器系外容器	
26	水沢	鶴岡市水沢	銅製製経筒、須惠器系外容器、刀子	
27	湯田川	鶴岡市湯田川	銅板製経筒、石製外容器、須惠器系外容器、刀子、鍍金	
28	西目	鶴岡市西目	陶製製経筒、須惠器系外容器	
29	狩川	立川町狩川	銅板製経筒、須惠器系外容器	(所在地不明)
30	羽黒山頂	鶴岡市(旧羽黒町)手向	銅製製経筒(建長4年(1252))	後世に一括で再埋葬されたと見られる
31	鷹尾山頂	酒田市北沢	陶製製経筒、須惠器系外容器	
32	経ヶ嶮山	平田町楢橋	陶製製経筒、須惠器系外容器	
33	新山	平田町新山	須惠器系外容器	
34	楯の腰	八幡町腰	須惠器系外容器2	
35	山寺	松山町山寺	須惠器系外容器	
36	金俣	遊佐町吉出	土師系外容器、木製経筒、軸木	1992年遊佐町金俣経塚として調査
37		寒河江市平塩	八角型石製経筒、陶器、刀子、石製鏝鏡	平成27~29年に調査



「山形県内埋経塚分布図と一覽」

うきたむ考古資料館第12回企画展「埋められた経 こめられた願い」2004年より作成

経塚における属性の変遷概念

属性	時代・年		安土桃山 江戸						
	属性の細分	平安	鎌倉	南北朝	室町	1500	1600	1700	1800
願意	未法と教法の保存	——	——	——	——	——	——	——	——
	追善供養・現世・逆修供養	——	——	——	——	——	——	——	——
	五穀豊穡・厄病退散・水難除去	——	——	——	——	——	——	——	——
埋納方法	岩窟・巨岩の隙間	——	——	——	——	——	——	——	——
	塚造営	——	——	——	——	——	——	——	——
	埋納施設（小石室）	——	——	——	——	——	——	——	——
	土坑	——	——	——	——	——	——	——	——
	外容器（円筒・六角も含むか）	——	——	——	——	——	——	——	——
奉納品	経碑	——	——	——	——	——	——	——	——
	紙本経・銅板経他	——	——	——	——	——	——	——	——
	経筒	——	——	——	——	——	——	——	——
	経筒（小型・画一化）	——	——	——	——	——	——	——	——
	副納品	——	——	——	——	——	——	——	——
発願者	礫石経	——	——	——	——	——	——	——	——
	支配者層・僧侶	——	——	——	——	——	——	——	——
	六十六部廻国聖	——	——	——	——	——	——	——	——
立地	僧侶・民衆	——	——	——	——	——	——	——	——
	山頂	——	——	——	——	——	——	——	——
	霊地・聖地	——	——	——	——	——	——	——	——
	寺社境内	——	——	——	——	——	——	——	——
	交通の要衝・村境・堤防	——	——	——	——	——	——	——	——